

第2回中間報告

(報告期間: 2022/1/18 – 2022/3/18)

提出日: 2022/3/25

国際ロータリー第 2710 地区

2021-22 年度地区補助金奨学生

ジェイムズ常マシュー

派遣ロータリークラブ: 広島中央ロータリークラブ

カウンセラー: 西川済様

留学機関: University of York

専攻: MA English Literary Studies

1. 今学期受講した講義

1/18 に秋学期対象科目の成績評定レポートの提出締め切りを迎えた後、すぐさま春学期の講義が幕を開けました。今学期も原則、マスク着用義務を課されたうえで、対面での受講となりました。必修科目の“Postgraduate Life in Practice”(「修士課程の基本、及びその実践」)も対面での受講が基本となりました。

■ Contemporary Women’s Writing: Bodies, Health, Voices

(現代女性作家による作品研究: 身体、健康、「声」に着目して)

この講義では、2010年代後半に書かれた現代アメリカ / イギリスの女性作家たちによる、女性の「身体」「健康」「声」(ここでの「声」とは字義通りの「発声」ではなく、「作品を書くこと」「作品を通してメッセージを投げかけること」の意味合いの方が強い)に着目した作品を精読しました。担当講師のアリス・ホール博士 (Dr Alice Hall) は、20-21世紀アメリカ / イギリスの女性作家による作品、フェミニズム批評 / 理論、文学における障がい、医療人文学を中心に研究されています。この講義では、まず、前半に Sara Ahmed, Rosi Bradiotti などといった、フェミニズム哲学者や批評家による毎週異なる様々なフェミニズム理論 / 批評の文献を読み込み、学生がプレゼンテーションを行いました。後半では、対象作品のディスカッションやホール博士によるレクチャーが中心になりました。扱ったテーマとしては、終末医療やそれを「語る」「書く」こと、「身体」と「心」の関わり合い、家父長制や IVF (体外受精)、共感、レイプ、中絶、現代アメリカ / イギリス文学における“#MeToo”運動、「自然分娩で子供を産むことでしか女性の価値が認められない」ディストピア小説などが挙げられます。とても複雑でデリケートなものばかりでしたが、こうしてきちんと文学を通して真正面から向き合ったことで、これからも理解を試み続けたいと思いました。また、なぜ現代アメリカ文学の一角であり続けるのか、これからも考え続けていきたいと思いました。



(画像は、この講義で扱った作品の一部です。)

左より、 *What Are You Going Through?* (2020) – Sigrid Nunez テーマ: 終末医療、それを「語る」「書く」こと、共感

“Cat Person” (同題名短編集表題作) (2017) – Kristen Roupenian テーマ: 性行為における同意、デートカルチャーの問題点、男女間のパワーバランスの不均衡、“#MeToo”文学としての批評)

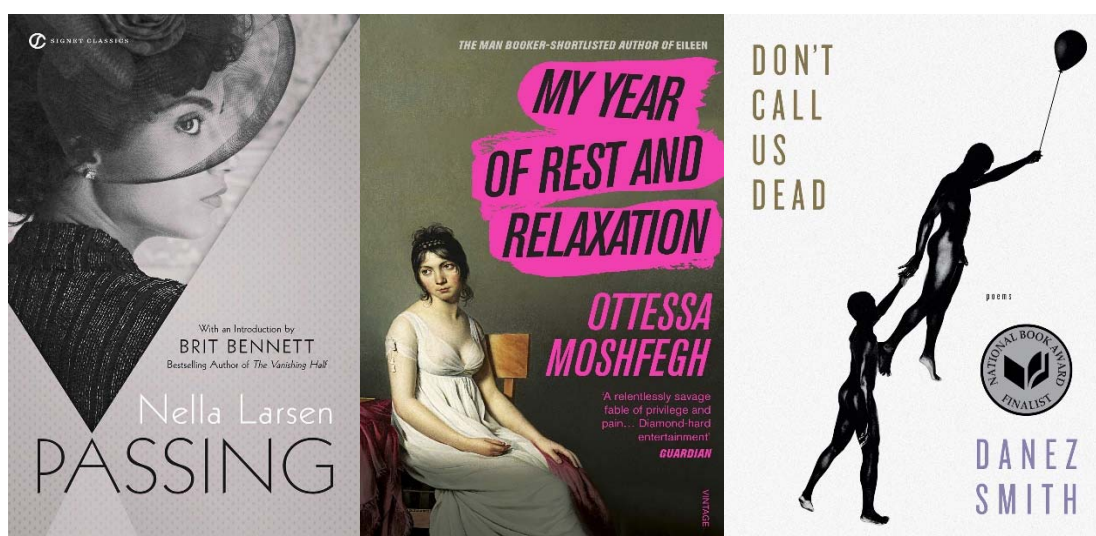
Red Clocks (2018) – Leni Zumas テーマ: 中絶、IVF が禁止され、自然分娩での出産が女性の価値を決めるディストピア、核家族問題)

■ “Black Is / Black Ain’t” – Speculative Blackness in American Literature and Culture

(「黒人であり、黒人ではない」ー 現代アメリカ文学 / 文化における「不確かなもの」としての「ブラックネス」)

この講義では、ただ単に現代アフリカン・アメリカ文学を読むのではなく、何が黒人を「黒人」たらしめるのか? 人種 / 肌の色 / 出自はどういった関係にあるのか? といった点に着目し、「黒人」「アフリカン・アメリカン」文学 / 文化を「不確かなもの」(“Speculative”)として読み解きました。担当講師のジャニー・ブラッドベリー博士 (Dr Janine Bradbury) は、現代アメリカ・イギリスの黒人文学 / 文化、とりわけ人種や肌の色の差による社会、文化的差異を中心に研究されています。「黒人」として生まれるも、肌の色が薄い褐色である故ほぼ「白人」と肌の色が変わらない女性が「白人」として生きる小説、*Passing* – Nella Larsen (1929) の精読(このテーマを扱った小説は“Passing genre”と

呼ばれます)から講義は始まりました。また、白人による黒人差別の正当化 / 矮小化に用いられる “Magical Negro” としての「黒人」、クィアの黒人で HIV を患う詩人の作品や、黒人コミュニティ内における肌の色の濃さ薄さによる差別、Whoopi Goldberg / Sidney Poitier / Grace Jones といった黒人のポップアイコンの作品などから、多角的にかつ脱構築的に「黒人」とは、“Blackness” とは何か? という問いにアプローチしました。前学期受けた講義とは全く異なるスタイルによる「アフリカン」「アフリカン・アメリカン」文学 / 文化を観察し、かつより「現代文化」に根差していた講義で、観点の深化に繋げるきっかけになったと考えています。



(画像は、この講義で扱った作品の一部です。)

左より、*Passing* (1929) – Nella Larsen テーマ: 「黒人」が肌の色の薄さをもとに「白人」として生きること、その是非と倫理、“Passing genre”、肌の色の薄さ / 濃さ

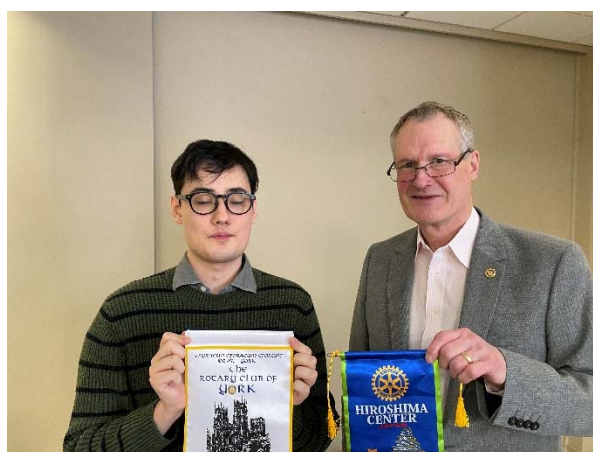
My Year of Rest and Relaxation (2018) – Ottessa Moshfegh テーマ: Whoopi Goldberg, 自ら睡眠薬を飲んで“Rest and Relaxation”し、世界との関わりを遮断すること、「信頼できない語り手」)

Don't Call Us Dead (詩集) (2017) – Danez Smith テーマ: 黒人としてエイズを患っていること、「クィア」である自身とエイズの関わり、それに起因する社会からの抑圧 / 差別)

2. 現地ロータリークラブとの関わり

2/18 に York Rotary のランチミーティングに参加させて頂きました。York Rotary の会員の皆さまに、自己紹介、何を学習しているか、何故 York という場所を選んだか、派遣ロータリークラブがどのよう

な活動を行っているのかなどをお話しさせていただきました。プレゼンテーションの後、僕自身が日英のバイリンガル話者であることから、非英語圏で育ちながらどのように英語を身に着けたか、ロータリークラブの活動に関する質問や、イギリスにきて 1 番戸惑ったこと、日本の皇族とイギリスの **Royal Family** の差をどう考えているか (!) といった様々な質問を受けました。現地のロータリー事情に触れ、関わることができ、意味ある経験となったと思います。4 月末に開催される York Rotary 主催のイベントにご厚意で参加させて頂く予定になりましたので、糧になるものを生み出せるよう努めていきたいと思っています。



(写真は York Rotary の会長の David さんと... 僕自身は常々壊滅的に写真写りが悪いので、目を閉じてしまったことはご容赦くださいませ)

3. これからの予定

約 1 週間前に講義が全て終了し、現在は今学期受講科目のレポート作成に追われています。また、修士論文の指導教官も決まり、レポート提出後にはいよいよ修士論文作成が本格化します。

今学期を生活情勢から振り返ると、“Plan B”(イギリス政府による新型コロナウイルス対策の総称。マスク着用の義務や無料 PCR 検査、ワクチン接種のガイドライン、「ソーシャル・ディスタンス」やその違反に関する罰金など非常に多岐に渡るものを定めています) が終了したことがまず挙げられます。(だからと言って新型コロナウイルスをイギリスが抑え込んだか、と言えば勿論“NO”としか言えないのですが... 新型コロナウイルス新規感染者は、以前程ではないにせよ、今も高い数字(約 90,000 人)を日々記録し続けています)

また、ロシアによるウクライナ侵攻に際し、University of York では学長の名で抗議の意を表明するス

テイトメントが出され、有志による抗議集会も行われました。更に、Week 6-8 にかけて、イギリス全土の大学で UCU (The University and College Union ... イギリスの大学教員 / 職員の労働連合) による、年金カットや任期付きポジションの廃止、改善、給与待遇の格差是正を求める大規模ストライキが行われました。参加教員のストライキ対象期間の講義は補講や代替措置が一切なく、学生に対する事務業務も全て停止するなど、大打撃と大波乱だったと言えます。僕が受講した講義はストライキの影響は一切なかったのですが、対象期間の講義が全てキャンセルされた友人もたくさんおり、絶えずこれらの政治情勢に大きく精神が振り乱された日々となりました。

身体に気を付け、勉学に引き続き励みたいと思います。これからも宜しくお願い致します。